

『#武田の金、毛利の銀』（垣根涼介著）を読んだ。著者は『午前三時のルースター』でサントリーミステリー大賞と読者賞をダブル受賞。『ワイルド・ソウル』で、大藪春彦賞、吉川英治文学新人賞、日本推理作家協会賞の史上初となる3冠受賞。その他、『光秀の定理』『室町無頼』『信長の原理』などがある。

著者は、これまで『光秀の定理』、『信長の原理』で信長や光秀を独特の視点で描いている。本書は、その織田信長が明智光秀に武田家と毛利家の財力を調べるよう命じるところから始まる。資金源として武田家は湯之奥金山を抱え、毛利家は石見銀山を持っている。敵対する大名の財力を把握して、財力の弱い方と戦いをしようというわけである。そのためには光秀は、敵地に潜り込み、金銀の産出量を示した台帳を確認しなくてはならないのだ。見つければ命の保証はない危険な使命である。光秀は盟友の剣豪と僧を伴って隠密裏にまずは武田の甲州へ向かう。途中、そこで武田家の家臣と名乗る男と出会い、甲州を目指す。そこで、情報を得ると次は石見銀山へ向かう。

時代小説でありながら、戦闘を扱うのではなく（ハラハラドキドキはない）、敵の経済状況を探る過程を描くのは珍しい。金や銀の採掘量が軍事能力に直結するという発想が秀逸である。

出会った武田の家臣が、その後徳川家の舞台骨の経済を支え、最後に失脚する男というのが、私には驚きであった。その名は大久保 長安。

大久保 長安（本書では土屋 長安）は猿楽師の次男として生まれる。武田、徳川の家臣となり、家康のもとで吏僚として活躍し、鉱山の開発を担った。長安は信玄に見出されて、猿楽師ではなく家臣として取り立てられ、譜代家老の与力に任じられた。武田領国の鉱山開発や税務などに従事した。甲斐武田家が滅んだ後、長安は徳川家康の家臣として仕えるようになる。わずか数年で甲斐の内政を再建したと言われている。長安が行った検地は石見検地と呼ばれ、従来の1間を6尺1分に短縮して打ち出しを強化するとともに、自作農の保護にもあてるというものであった。関ヶ原後、豊臣氏の支配下にあった佐渡金山や生野銀山などが全て徳川氏の直轄領になる。すると長安は石見銀山検分役、佐渡金山接收役となる。その後、甲斐奉行、石見奉行、美濃代官に任じられた。これらは全て兼任の形で家康から任命されている。異例の昇進と言っても

よく、家康が長安の経理の才能を高く評価していたことがうかがえるものである。家康が将軍に任命されると、長安も特別に従五位下石見守に叙任され、同時に年寄に列せられた。

長安は家康から全国の金銀山の統轄や、関東における交通網の整備などの一切を任されていたのである。これら一切の奉行職を兼務していた長安の権勢は強大であったと言われる。「天下の総代官」と称された。この頃、長安の所領は八王子8,000石（実際は9万石）に加えて、家康直轄領の150万石の実質的な支配を任されていたと言われている。

しかし晩年に入ると、全国の鉱山からの金銀採掘量の低下から家康の寵愛を失い、美濃代官を初めとする代官職を次々と罷免されていくようになる。長安の死後に生前の不正蓄財が問われ、また長安の子は蓄財の調査を拒否したため、息子らは切腹となった。縁戚関係の諸大名も改易となった。無類の女好きで、側室を70人から80人も抱えていたと言われている。金山奉行などをしてきた経緯から派手好きであり、死後、自分の遺体を黄金の棺に入れて華麗な葬儀を行なうように遺言したという。

こんな資料を元に、著者は光秀と長安（どちらも十兵衛）を出会わせて鉱山調査を行わせたのかもしれない。